

教師としての心構え

センター長 水島 見一



大谷大学の第五代学長である稲葉昌丸先生は、初代学長の清沢満之先生と同じく育英教校に学ばれた後、東京帝国大学に入学され、動物学を専攻されました。その稲葉先生が現在の大谷中・高校の校長時代に次のような講話をなされています。

法師には三つの髻がある、名聞と、利養と、勝他である、と聞いて居ますが、此三つは中々絶つことが難しいものである。なに名や金などの為に心を痛めるは、大丈夫の恥ずべき事である、と諸君は云はるるか知らんが、中々さうでない。之は実際問題である。諸君も日々の業務の間に於て、名聞なり、利養なり、勝他なり全く絶ち得たと断言する事は出来ぬだらうと思う。(中略)然るに悲むべきは之に止まらぬ、一層恐るべき事がある。名や金の為に心を悩まして居ると、不知不識の間に浅間敷心持となる。我は今此如き待遇を受けて居る故、之に対する勤労は此で充分である、此已上の労を執るべき義務を有せぬなどいふ気が、心の何処かに潜んで居て、時々頭を持ち上げる。・・・(『大谷中・高等学校百年史』「自己修養の大法」43頁)

自分自身を素直に見つめている文章です。自分の中に巣食う「名聞」「利養」「勝他」という「煩惱」の断ちがたいことを、生徒の前に正直に告白されていることがよく分かります。教育とは、「教師が心を『無』にして子どもの心の中に入ることである。そうすれば必ず、子どもたちはそれに自ずと気付くのだ」(広小路亨)とされています。稲葉先生が生徒を前にして「名や金の為に心を悩まして居ると、不知不識の間に浅間敷心持となる」と言われていますが、これが「心を『無』して」ということになるのではないのでしょうか。

若しかしたら、生徒達は、その純粋な眼差しで、無意識の行動や何気ない言葉など、教師の全体像を見抜いているのではないのでしょうか。あるいは、それぞれの心に、たとえば、「あの先生は、すぐキレるからなあ」など、教師の「人物像」なるものを刻んでいるのではないのでしょうか。

か。そして、それに気づかないのは教師だけではないのでしょうか。そのように見抜かれている教師が、真顔で、教育的な言葉を生徒に投げかけても、それでは効き目のないことは言うまでもありません。案外、こういうところに教育の荒廃の原因があるのかも知れません。

「名聞」「利養」「勝他」とは、我々の拭い去ることのできない「煩惱」なのです。そして、その消し去ることのできない「煩惱」は、仮に隠したとしても、生徒からすれば、「丸見え」ではないのでしょうか。では一体、煩惱をもっている教師は、どのようにしたら教育できるのでしょうか。精一杯、理想を語り教育的方法を駆使しても、それでも生徒の「煩惱」を見抜く眼を蔑ろにできません。ここに稲葉先生の教育姿勢が思い合わされます。生徒と全く同一の、人間の地平に立って、そして生徒に侘びるかのごとく、「心の何処かに潜んで居て、時々頭を持ち上げる」と言われていますが、ここに稲葉先生の教育者たる「威厳」があるのではないのでしょうか。

ある卒業生は、稲葉先生の風貌を、先生はいつも衣で非常に厳格な方で、あまり学生に対して親しくしたり、笑顔等を見せられなかった。何か黙々として、あたりを見抜いておられるような態度で、身体は小さくして眼鏡は非常に強度でアダ名を大学目薬とっていました。学長、当時は校長と言わずに学長といったが、廊下などで立っておられると乱暴な生徒でもピリッして畏怖するような威圧感を持っておられた。(『大谷中・高等学校百年史』119頁)

と語っています。稲葉先生が通るだけで「ピリッとして畏怖するような威圧感」を感じるそうですが、その「威圧感」はどこから来るかと言えば、生徒と同じ人間の地平に立って、生徒を尊重し、そして自分の煩惱を侘びるという、「無」なる教育的良心からだと思います。人間として生徒を尊重し、人間として教師の煩惱を侘びる。ここから教育が始まるのではないのでしょうか。

目次：

教師としての心構え	1
教員受験直前講習	1
緑・自覚・志	2
伝わってなんぼ!	2
経験を積むことの大切さ	3
学校ボランティア経験は 教師になるための原動力	3
あなたのもてる力を 十分発揮できるように	4
教職支援センターの役割	4
教員採用選考試験説明会	4

「教員受験直前講習」が始まりました

教職支援センター アドバイザー

全国で7月中下旬に実施される教員採用選考試験に向けて講習会が始まりました。4月16日(土)から7月6日(木)間での7日間、9講座です。自己推薦、面接、論作文などの内容を中心に、可能な限り個々の受験先への対応を目指して行きます。教育実習をはさみますので、どうしても日程が分散しますが、集中力を失わず効率的に取り組みたいと考えています。

この講習を通して、受験対処法のみを会得するのではなく、教師になる自覚をより深め、教育の本質的なものに触れるとともに、志を同じくする仲間たちと互いに高めあう機会にしたいと願っています。

直前講習を受けなかった受験者についても遠慮なく教職支援センターを訪れ、受験準備態勢をつくってください。



- 甘えを排除
- 志高く
- 自分を開く
- 学び続ける



教員にとって
重要な能力
とは
「伝える力」



■ 縁 ・ 自覚 ・ 志

— 後輩たちに伝えたいこと — 京都市立衣笠中学校教諭 木村 一平

国語科非常勤講師を6年、常勤講師を2年、8年間に及ぶ講師時代を過ごした。以下は、成功譚ではなく、懺悔譚である。

大谷大学を離れてからの6年間、非常勤講師として、のべ6校（兼務を含む）の中学校で勤務する機会をいただいた。先輩教員からは、「採用厳しいけど、絶対諦めたらアカンで」と励ましをいただきつつも、本市での採用はほとんどなく、将来展望がもてないまま悶々として5年を過ごす。教材研究に力を注ぎ、目前の生徒に対して、精一杯向き合ってきたつもりであるが、今思うと、どこか気後れをし、自らに「線」を引いた5年間であったことは否めなかったと思う。

転機が訪れたのは、総合育成支援員として勤務した3年前のことである。腐り気がめりりがちな私に、活動の場をたくさん与えてくださったのは当時の校長先生であった。そして、たくさんの同世代の「先輩」教員が魅力的な教育実践に努めておられ、多くの刺激を

私に与えて下さった。その姿にまねび、日々の実践の中で自らが開かれていくことを感じ、恥ずかしながら、初めて教師という仕事に目覚めた。そして自分の甘えに気付いた。

茨木のり子に『自分の感受性くらい』という有名な詩がある。

「ばさばさに乾いてゆく心をひとのせいにはするな みずから水やりを怠っておいて」

「初心消えかかるのを暮らしのせいにはするな そもそもがひよわな志にすぎなかった」

「駄目なことの一切を時代のせいにはするな わずかに光る尊厳の放棄」

状況に甘え続けていたのはまさしく私であった。

「よき人との出会い」を大切にし、甘えを排除し、志高く、自分を開いて積極的に学び続けること。

こうしたことの必要性を後輩の皆さんにお伝えしたい。

■ 「伝わってなんぼ！」

京都市立衣笠中学校教諭 早田 一也

私はここまで5年間、講師として教壇に立ってきた。今年度、採用選考試験に合格し新規採用になる。

私はこの5年間で、中学校教員として最も身に付けなければならない力を一つ挙げるとすれば「伝える力」である。私がなぜ「伝える力」が必要と感じるか。それは、どれだけ教科に関する知識をもっているか、どれだけ生徒に対する熱い思いをもっているか、それが生徒たちに伝わらなければ意味がないと考えているからだ。教科指導にしても、生徒指導にしても、部活動指導にしても、私は子どもたちに「伝わってなんぼ！」と思っている。生徒たちの心に響かせ、感じさせ、そしてさまざまな場面で成長させてこそ教育と言えるのではないだろうか。教科に関する知識や生徒に対する熱い思いは、うまく伝わらないと時に生徒たちの反感をかうこともある。

どんな知識も思いも、教員としてすべて伝わってこそ意味がある。だからこそ、中学校教員にとって「伝える力」は大変必要な能力だと私は考える。

これから教員を目指されるみなさんには、人に物事を伝える手法をぜひ身に付けていただきたい。教員は「やりたい」だけでは務まらない仕事。人とコミュニケーションをとるのが苦手という人には絶対無理な仕事。だからこそ「教員になりたい。」と考えている人は「伝える力」を身に付けてほしいと思う。

私は、常に自己満足で終わるような指導は絶対にしたくないと思っている。これからも何を指導するにも意味をもって、伝え、常に「子どものための教育」を追究し自分自身もその実現のために邁進していきたい。

■ 経験を積むことの大切さ

八尾市立曙川南中学校教諭 大古 美沙

大谷大学のみなさん、入学・進級おめでとうございます。おそらく、皆さんはこれから待っている様々な新しいことにワクワクしていることかと思えます。

しかし、大学生活は皆さんが思っている以上にあっという間に過ぎていきます。よく計画を立てて行動しなければ後から「もっとああしておけばよかった」と後悔することになります。そのような後悔をしなくて済むように、教員を目指すみなさんへ、私から少しだけアドバイスをしたいと思います。

学校現場では、講師であろうが教諭であろうが教壇に立てば同じ「一人の教師」です。大学を卒業したばかりでも、生徒や先生方から「先生」と呼ばれ、様々な仕事をこなさなければならないのが現実です。では、そんな学校現場へ出た時のために、大学生の皆さんが今できることは何なのか。それは「たくさんの経験を積むこと」です。例えば学生ボランティアやインターンシップに参加することです。私自身も、学生時代にその両方に参加していました。学生ボランティアに参加することは、学校現場を知る良い機会になると思います。まずは、学生ボランティアから出来ることを始めてみるのが良いでしょう。またインターン

シップは、教育実習に行く前に参加しておくことをお勧めしておきます。なぜなら、インターンシップに参加しておくことで教育実習への意識が変わるからです。学生ボランティアだけではわからない「学校での1日の仕事」を体験しておくことで、3週間の実習をより充実したものに変えることができます。

また、このような経験だけでなく「人生としての経験」を積むことが大切です。なぜなら、私たちの人生経験そのものが教材だからです。その経験が、成功であろうと失敗であろうとどちらでもかまわないのです。大切なのは、自分自身が経験したかどうか。また、その経験を通して、何を学んだかです。だからこそ、比較的自由な時間がある今に皆さんにはたくさんを経験してほしいのです。実際に経験したことなら生徒たちに話をするのはいくらでもできますが、経験したことのないことを語るのとは不可能です。失敗を恐れず、何事にも挑戦する勇気をもってください。そうすれば、「教師」としてだけでなく「一人の人間」としてもっともっと成長できるはずですよ。そして、「今」という時間を有意義なものにしてください。皆さんの活躍を心から期待しています。

- 経験を通して学ぶ
- 何事にも挑戦する
- 人として成長する



- 南丹学びサポーター経験を積むことで、より自分を成長させ、自信を持って夢に向かって進むことができる。



■ 学校ボランティア経験は教師になるための原動力

国際文化学科 卒業生 西村 舞

私は、2009年4月から2年間、亀岡市立詳徳中学校で週2日「南丹学びサポーター」として学校ボランティアに参加していました。朝から放課後まで丸1日、別室登校生徒の指導サポートや清掃監督・部活動指導サポート・朝学習テストの採点などを行っていました。

このような経験をたくさんさせてもらったことで、私は教師の仕事や学校の現状について知ることができました。また、自分の言動や癖など、介護等体験や教育実習で気づいたことがより分かり、改めて自分をしっかり見つめ直すことができました。

学校ボランティアを始めた頃は、教師という立場で学校現場に入ることや生徒との関わり方に、戸惑っている自分の姿がありました。しかし、回数を重ねていくうちに、教師という立場で接することに戸惑いが無くなってきただけでなく、周りを見ることに余裕も出てくるようになりました。

2年目にもなると、声をかけてきてくれたり、名前を呼んでくれたりする生徒も増えました。

私が2年間の学校ボランティアを通じて感じたことは、『経験を積むことで、より自分を成長させ、自信を持って夢に向かって進むことができる。』ということです。当たり前のことかもしれませんが、とても大切なことだと思います。自分が教師としてやっていけるのか迷った時、学校ボランティアの経験が自分の背中を押してくれていることを、身をもって感じました。もし学校ボランティアに参加していなかったら、私は教師になることを諦めていたかもしれません。そう思うくらい、私にとって詳徳中学校での2年間は貴重な経験でした。

最後に、今まで学校ボランティアとして2年間受け入れてくださった亀岡市立詳徳中学校の先生方、本当にありがとうございました。

「あなたのもてる力を十分発揮できるように」 新教職アドバイザー 馬場 信行



私は、4月から教職アドバイザーとして着任した馬場信行です。主に幼稚園・小学校の課程を担当します。

「ぜひ教師になりたい」と学びに励んでいる皆さんの願いを実現してもらうため、お役に立ちたいと思っています。

「ゼヒトモ教師」という言葉を聞いたことがあります。本人に「ゼヒトモ」教師になりたいという意欲と使命感があり、第三者から見ても、その人に「ゼヒトモ」教師になってもらいたいという教師です。この二つに視点は、とても大切だと思います。

あなたの目指す教師像は、どんなものですか。その実現に向け、まずは教員採用選考試験合格の準備をしましょう。そして将来の日本を世界を背負って立つ子供たちの教育の場に立ちましょう。

学びについて、教員採用選考試験の準備等まずは来室して話しかけてください。「あなたのもてる力が十分発揮できるように」共に考えて行きましょう。

第2学年から参加したい 2012年度 教員採用選考試験説明会

- 参加対象・・・教職を目指す全学年の学生が対象
(第4学年については受験先の説明会には必ず参加し、詳細を直接聞くこと)
- 服装・・・スーツを着用すること
[その他・・・参加する学生の「教員になる」という強い意欲・関心・態度の姿]が大事

堺市[教育委員会] 説明会
・日時：5月10日(火) 16:30~17:30・会場：4号館 4201教

京都府[教育委員会]説明会
・日時：5月11日(水) 16:20~17:50・会場：5号館 5202教室

京都市[教育委員会]説明会
・日時：5月19日(木) 16:30~17:50・会場：5号館 5203教

滋賀県[教育委員会] 説明会
・日時：5月25日(水) 16:30~17:50・会場：5号館 5203教室

教職支援センターの役割は？



めざそう・・・憧れの先生を！

教員をめざす学生をさまざまなかたちでバックアップするのが教職支援センターの役割です。

教員になるためには？

教員免許状の取得と教員採用選考試験の合格が不可欠です。そこで、本センターでは、単位取得の方法や履修計画に関する相談、教員採用の各種説明会や学校現場へのボランティアなどの紹介、教育実習に向けた指導などを行い、学生の「“ゼヒトモ”教員になりたい」との夢の実現をサポートしています。では、どのようなサポートでしょう。

Support 1

教員免許取得に向けたサポート

免許取得への履修相談や教育実習・学校ボランティアの紹介など本センターに関わる教職員が連携してサポートしています。

Support 2

教職支援センター資料室のフル活用

資料室では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教科書や参考書などを配架しています。特に、教員採用選考試験の過去問などについては充実させてサポートに努めています。

Support 3

教職アドバイザーや「大谷教師塾」のフル活用

教職アドバイザー（細谷・西寺・馬場の3人）がマンツーマンで試験対策や心構えなどを指導します。また、本誌・教員養成ナビゲーター「大谷教師塾」を発刊し、サポートしています。



大阪市教員採用選考試験説明会 4月13日